



# 秋の風景

「稲の波 案山子も少し 動きおり」(高浜虚子)。

里山が織りなす秋には多彩な顔があります。実りを重くして稲穂が垂れ、波のようにうねる田んぼの風景は人の心を豊かにしてくれます。

秋桜あきざくらと言えはコスモスです。住宅街ではピンクや白のコスモスが目に付いてきました。夏の厳しい暑さに耐え、今を盛りに咲く花が風にそよぐのを見てみると気持ちしが和みます。

篝かきりびき火草ひまわらはシクラメン。鈴懸すずかけ木きならばプラタナス。ナナカマドきが赤みを増し、クリの実は立派なイガをつけ鮮やかな緑色に輝いています。秋は草花の輝くときでもあります。植物の和名は見事に花の姿を表し、それぞれの名に味わい深さがあります。

夕方に黄色い花を咲かせるのがマツヨイグサです。マツ

ヨイグサは夏の季語とされていますが、虫の鳴く月夜に咲く姿が似合う花です。

待よいまらてど暮らせど来ぬ人を／宵待草よいまらぐさのやるせなさ と竹久夢二は詠うたっています。どうやら「宵待草」は夢二が作った言葉のようです。造り酒屋で生まれた夢二が「酔い待ち草よいまらぐさ」と詠んだのかもかもしれません。今宵こよひは月も出ぬそうな と詩は続きます。空気の澄んだこの頃、月も多彩な顔を見せてくれます。

この世をば わが世とぞ思ふ 望月の 欠けたることもなしと思へば (この世は 自分のためにあるようなものだ 望月もちづき (満月) のように 何も足りないものはない) と詠うたんだ古人いにしよの人がいました。

望月もちづき (満月) の次の月が十六夜ざいよひです。「十六夜」には「い



ざよう」「ためらう」「ぐずぐずする」の意味があります。月も満月の後はためらいながら顔を見せたのかもしれない。月の出が遅くなるにつれ呼び名が変わってきます。立たち待月まちづき、居待月いまちづき、臥待月ふまちづき、更待月さらまちづき。庭先に立ち、家の中にいて、そして寝ながらと、お月さまを待ちわびたのでしよう。

夏、日差しを避けるように通った小道も、風が涼しくなるにつれ表情を変えています。いつしか街路樹のこずえの先にはいわし雲が広がり、そこには空もすっかり秋色に変わっている秋の風景があります。

指宿市長 豊留悦男

